

上勝町「榎原の棚田」の文化的景観調査と考察*

Cultural Landscape Survey and Consideration of Rice Terrace in Kashihara, Kamikatsu- Town*

澤田俊明**・田中紀子***・花岡史恵***・新開晴美****・平井松午*****

By Toshiaki SAWADA**・Noriko TANAKA***・Fumie HANAOKA***・Harumi SHINGAI****・Shogo HIRAI*****

1. はじめに

(1) 背景

平成 17 年 4 月 1 日の文化財保護法の改正により、文化財として新たに「文化的景観」が位置づけされた。そして、文化的景観の保護の仕組みとして、景観法に定める景観区域または景観地区にある文化的景観のうち、特に重要なものを「重要文化的景観」として選定する「重要文化的景観の選定」の制度が誕生した。

重要文化的景観の第 1 号として、平成 18 年 1 月 26 日に「近江八幡の水郷」（滋賀県近江八幡市）が選定され、その後、計 4 カ所が選定されている。水田景観については、平成 19 年 6 月現在、榎原の棚田以外に、「大山の千枚田」（千葉県鴨川市）、「蕨野の棚田」（佐賀県唐津市）、「姨捨の棚田」（長野県千曲市）などで調査・検討が実施されている。

徳島県上勝町榎原地区に位置する「榎原の棚田」は、平成 11 年に農林水産省より「全国棚田百選」の一つに選定され、平成 16 年より、地元棚田保全組織である「榎原の棚田村」主催による「棚田等オーナー制」がスタートしている。

平成 17 年の文化財保護法における文化的景観の創設に伴い、地元棚田保全組織「榎原の棚田村」の要望もあり、平成 17 年度より、上勝町教育委員会により「榎原の棚田（水田景観）」及びその周辺地域を対象として、重要文化的景観選定のための「保存調査」および「保存計画（案）」の調査検討が行われている。

表 1 重要文化的景観選定の取り組み

	所在地	名称（仮称）	種類	備考
モデル調査	北海道 中標津町	中標津格子状防風林	複合景観	
	栃木県 宇都宮市	大谷石（採石場の景観） ¹⁾	集落に関する景観	保存調査実施
	千葉県 鴨川市	大山の千枚田 ²⁾	水田景観	保存調査実施

* キーワズ：景観、地域計画、GIS
 ** 正員、博（工）（有）環境とまちづくり（〒771-4501 徳島県勝浦郡上勝町福原川北 30 TEL0885-44-6290）
 *** 正員、（有）環境とまちづくり（〒771-4501 徳島県勝浦郡上勝町福原川北 30 TEL0885-44-6290）
 **** 非会員、上勝町教育委員会（〒771-4505 徳島県勝浦郡上勝町正木平間 110-1 TEL0885-45-0111）
 ***** 非会員、徳島大学総合科学部（〒770-8506 徳島市南常三島町 2-1、TEL088-656-7103）

その他	滋賀県 近江八幡市	近江八幡の水郷	複合景観	平成 18 年 1 月選定
	京都府 京都市	北山杉の林業景観	森林景観	
	兵庫県 稲美町	稲美のため池群	池沼景観	
	愛媛県 宇和島市	遊子水荷浦の段畑	畑地景観	平成 19 年 6 月選定
	福岡県 柳川市	柳川の掘割景観	水路景観	
	佐賀県 唐津市	蕨野の棚田	水田景観	
	岩手県 一関市	一関本寺の農村景観	農村景観	平成 18 年 7 月選定
	北海道 平取町	アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域	伝統文化、開拓	平成 19 年 6 月選定

(2) 目的

本研究は、平成 17 年度～18 年度の 2 カ年に渡り実施された、「榎原の棚田」における「保存調査」をもとに、棚田景観要素のうち、主要な景観構成要素である「農地（水田景観）」について、文化資源としての棚田景観価値に関する考察を行うものである。本紙面では、「棚田の形状」「石積み」「棚田の変遷」について考察を行う。

2. 榎原地区での文化的景観保存調査の概要

(1) 「榎原の棚田」の概要

a) 概要

棚田が存在する榎原地区は、四方を標高 700～900 m 級の山々に囲繞され、隣接する集落とは峠道で結ばれる小宇宙的な空間を形成している。農林水産省による「棚田」は、傾斜角度が 1/20 以上の水田と定義されており、「榎原の棚田」は、棚田面積 5.5ha・平均勾配が 1/4（平成 11 年棚田百選登録時データ）で、百選の棚田地区の中でも最も厳しい地形条件にある棚田の一つである。



写真 1 榎原の棚田

b) 経過

「榎原の棚田」を保全する地元住民意識には根強いものがあり、平成 7 年の第 1 回棚田サミット（高知県梶原町）への榎原住民 2 名の参加、平成 8 年の上勝町全域の棚田保全を考える「上勝町棚田を考える会」の発足、平成 10 年の榎原地区における「水車小屋」の復元など、一連の活発な棚田保全活動が継続的に行われてきた。

平成 11 年には、「日本の棚田百選」の一つに選定され、平成 15 年には榎原地区住民を主体とする棚田保全組織である「榎原の棚田村」が組織化され、平成 16 年には、上勝町の構造改革特別区として農地活用を含む「上勝町まるごとエコツアー特区」が国に認定された。

この特区を活用して、平成 16 年より「榎原の棚田村」が主催する「棚田オーナー制」が誕生し、現在 15 組前後の棚田オーナー（約 80 名程度）が活動している。

一方で、榎原地区住民 15 世帯は高齢化・後継者不足が一層進展し、榎原地区での棚田耕作等の維持が困難になり、平成 18 年には休耕農地が約 2.7ha に達した。

表 2 榎原地区における棚田保全活動の経過

年代	概要
平成 7 年 9 月	第 1 回全国棚田サミット参加（榎原地区から住民 2 名）
平成 8 年 12 月	上勝町全域の棚田保全を考える「上勝町棚田を考える会」の発足
平成 10 年 3 月	榎原地区における「水車小屋」の復元
平成 11 年 7 月	全国棚田百選に選定される
平成 15 年 11 月	榎原地区住民を主体とする棚田保全組織「榎原の棚田村」の発足
平成 15 年 11 月	榎原地区地域懇談会の開催（平成 18 年 4 月までに 14 回開催、上勝町住宅マスタープラン推進事業）
平成 16 年 4 月	「上勝町まるごとエコツアー特区」認定
平成 16 年 4 月	「榎原の棚田村」による農業体験開始
平成 17 年 4 月	「榎原の棚田村」による棚田オーナー制の開始
平成 17 年 3 月	榎原農家でワキガ 刺テ-の受け入れ（農作業・石積み作業・景観調査）
平成 17 年 6 月	重要文化的景観保存調査開始
平成 18 年 1 月	榎原の昔を語る会の開始（12 回開催・平成 19 年 6 月現在、文化的景観保護推進事業）

(2) 榎原の棚田における文化的景観の調査

a) 保存調査の概要

保存調査は、平成 17 年度、平成 18 年度の 2 カ年に渡り実施された。調査は、榎原地区及びその周辺地区を対象として実施されて、「上勝町の概観」「榎原地区の概観」「景観の構成要素」「地区景観の特性把握」について行われた。

表 3 保存調査の対象と項目

調査の対象	調査の項目
対象範囲	榎原棚田の水田景観百選エリアを中心とした榎原地区、及びその周辺地区
上勝町の概観	上勝町の町勢、上勝町の農業事情、上勝町の棚田
榎原地区の概観	榎原地区の年譜、成り立ち、耕作面積と戸数の推移、歴史的景観、災害、棚田畦畔の植生と昆虫相
景観の構成要素	農地、水系、樹木・山林、道、建造物、生活・文化、空間の景観特性
地区景観の特性	榎原地区の景観特性、個々の景観特性、地区景観の特性からみた保全等の対象

b) 構成要素の一覧

文化的景観を構成する景観構成要素は、自然の観点・歴史の観点・生活生業の観点より、下表に示す景観構成要素が調査対象となった。

表 4 景観構成要素一覧

要素	項目	調査内容	調査方法	
農地	耕作状況	現況耕作状況	個別聞き取り	
		現況耕作者区分	個別聞き取り	
		耕作地の変遷	資料・現地	
	農地の形状	畦の曲線・段	現地	
		小規模面積の農地	資料・GIS	
		石積み・土坡	石積み状況	現地
水系	水路系統	江戸～昭和時代	資料	
		農耕牛・仔牛生産・採草	資料	
	水路施設	榎原谷川	資料・現地	
		久保用水	個別聞き取り 資料・現地	
	水利慣行と配水の工夫	水車跡	全体聞き取り 現地	
		分水施設	個別聞き取り	
	道	道の変遷	灌漑施設	現地
			江戸時代	資料・現地
			明治・大正時代	資料
		昔の道の利用	昭和時代	資料
街道			全体聞き取り	
生活道			全体聞き取り	
現在の道	現在の車道	資料		
建造物	民家	江戸時代の民家とその所有者	資料・全体聞き取り	
		現在の民家	個別聞き取り 現地(15 戸)	
		現在の民家(詳細)	個別聞き取り 現地(2 戸)	
	その他	水車	現地	
		構造物	現地	
生活文化	生活	仕事	全体聞き取り	
		茅野	全体聞き取り 資料	
		神社・小祠	現地・資料	
		祭り	現地・資料	
	信仰・祭礼	石造物	現地・資料	
		墓地	現地・資料	
		山犬獄	現地・資料	
		景観	視点場	現地
空間	景観資源	現地		
	アワードズ調査	資料		

3. 景観構成要素とその考察

ここでは、「棚田の形状」「石積み」「棚田の変遷」について考察を行う。

(1) 棚田の耕作状況

平成 18 年度の耕作状況は、地元住民耕作による水田、オーナー制による水田、畑地、果樹、いろいろ（上勝町の葉っぱビジネス）、山林、管理、休耕地となっている。

平成 18 年度の現地調査及び GIS 解析の結果、檜原地区では、4.6ha のまとまりのある範囲で水田耕作がなされており、良好な水田景観が形成されている。一方で、休耕農地も 2.7ha に達している。減反政策をきっかけに檜原地区でも木材価格高騰の影響で、農地に植林をしたが、現在の木材価格低迷により、植林した農地が荒廃している。「いろいろ」による新しい農地利用が行われているもの、檜原地区には休耕地が増え続けているのが現状である。

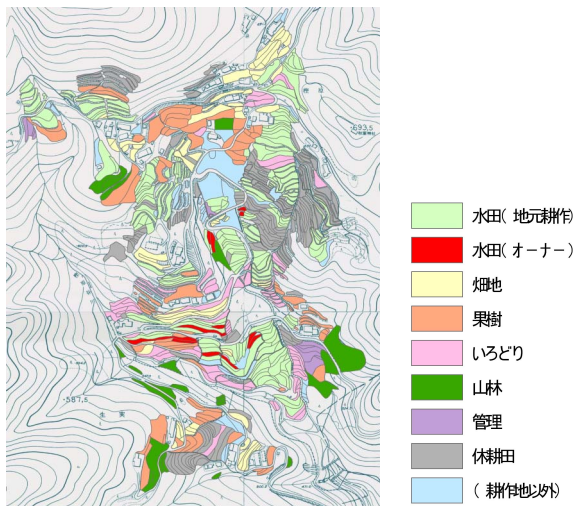


図 1 現況耕作状況図（平成 18 年度）

表 5 耕作区別農地枚数・面積一覧

区分	枚数(枚)	平均面積(a)	合計面積(ha)
水田(地元)	240	1.8	4.3
水田(オーナー)	13	2.0	0.3
畑地	71	2.7	1.4
果樹	85	1.6	2.3
いろいろ	85	4.9	1.4
山林	27	1.4	1.3
管理	13	2.5	0.3
休耕地	200	2.7	2.7
その他	52	1.9	1.3
合計	786	-	15.3

（耕作部分は現地及び聞き取り確認、面積計算は ArcGIS により算出）

(2) 棚田の形状（現状）

地滑り地帯特有のすり鉢状の形状を呈する檜原地区では、多くの地滑り跡地が棚田に利用されている。畦の形状は曲線で形成されており、自然的で良好な景観を形成している。

檜原地区の棚田景観を生み出している要素として、一

枚一枚の農地が比較的小さな面積であることがその要因として存在する。GIS により檜原地区の農地（休耕地を含む）の面積を算出すると、100m²（約 1a）～200m²（約 2a）の規模のものが最も多く存在しており、平均面積は、約 180m²（約 1.8a）と算出された。

また、1997 年に実施された檜原地区現地アフォーダンス調査³では、「畦の曲線」「畦の段」「水の音」が良好な景観要素として抽出されている。

檜原地区においては、「畦の曲線」「畦の段」「田畑の小さな面積」が、棚田景観の重要な構成要素となっており、保全が望まれる。特に、田畑の合筆が発生する場合、概ね 200m² 以下とし、最大でも 300 m² 以下が好ましいと思われる。



写真 2 小規模面積の棚田

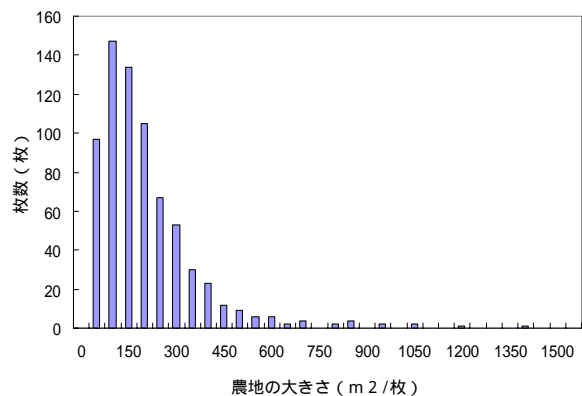


図 2 農地面積分布（ArcGIS により算出）

(3) 石積み

檜原地区の棚田畦畔は、石積み、土坡、及び、一部ブロック積みで構成されている。石積み分布調査は、目視による現地調査を行い、GIS 分析を実施した。個別農地の畦段長における石積み長の構成率をみると、80～100%が最も多く、檜原の棚田は石積みの割合が多いことが分かる。

檜原地区における石積み工法は、「乱層乱石積（手に入る石ならば野石・樵石を問わずに使用し、積み方も決まりがなく、農村において広く用いられている）」が大部分を占めている。

また、石積みや土坡による棚田畦畔は、ブロック積み等による畦畔とは違い、自然植生の繁茂や昆虫等の生息空間としての良好な生物環境を有している。

しかし、榎原地区は、地滑り地帯であることから、災害等で畦畔の崩壊が繰り返されてきた。そのため、近年では、石工の減少や経済性により、ブロック積みによる修復が行われてきた。今後は、農家の生活の知恵を活用した石積み工法の継承や、良好な自然景観および良好な生物環境を維持する上においても、自然素材で構築された「石積み」「土坡」は、景観上の重要な保存対象となる。

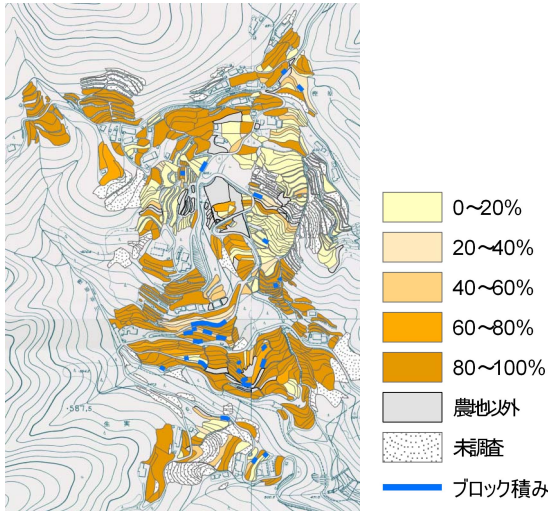


図3 石積み状況図(平成18年度)

(百分率数値は個別農地の畦段長における石積み長の構成率)

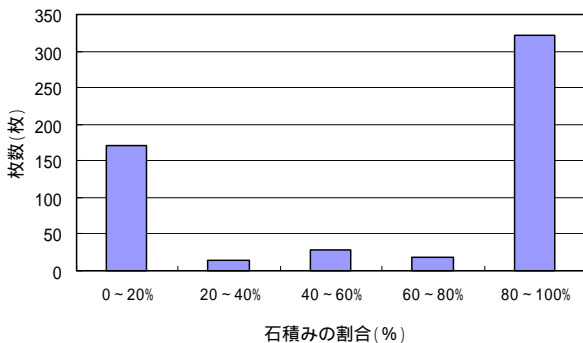


図4 農地の石積み分布割合 (ArcGISにより算出)

(4) 棚田の変遷

榎原地区の耕作地の変遷を、文化10年(1813年)文献絵図、1976年航空写真、2000年航空写真、2005年現地調査(第3回上勝リキョウホリデー(2005/9/15~9/18))にて調査した。

GISによる文化10年(1813年)文献絵図と現在の地図や航空写真との照合の結果、水田・畑地の形状や分布が素直に200年前のまま保持されていることが判明した。特に、文化10年(1813年)と1976年航空写真を照合してみると、水田・畑地の状況はほとんど変わらない。1976年から現在までの約30年間に休耕地が増えたことが分かる。

休耕地が増えた主要因として、1970年から始まった

減反政策による耕作者の大幅な減少、及び、経済性、過疎高齢化などが、指摘されている。

休耕地は、転出戸が耕作していた農地や家屋から遠く離れた水田からまず放棄される傾向にあり、その場合、杉が植林されるケースが少なくない。そのため、集落周辺の林地化が進んでいる場所も見られる。

休耕地は増えたものの、榎原地区で多くの棚田は現在も耕作されている。残存する水田・畑地の形状分布は、200年前と変わらない歴史景観をそのまま現在に残している重要な景観要素と言える。

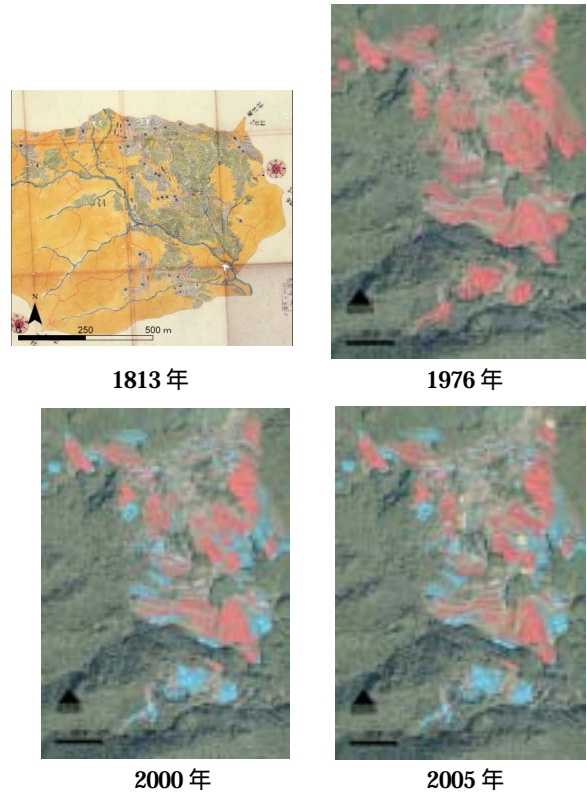


図5 耕作状況図(赤:耕作地、青・ベージュ:休耕地)

4. おわりに

本格的な榎原地区の文化的景観の保存調査により、棚田景観の文化的価値が明らかになりつつある。

全国の他の棚田地域と同様、極端な高齢化が進展する「榎原の棚田」において、保存調査に基づく、継続的な保存が担保できる「保存計画」の内容と実効性が大きな「カギ」となる。そして、文化的景観の価値の理解・共有、保存のため規制・制約にかかる地域の合意形成の必要性が、一層重要な局面になってきている。

参考文献

- 1 大谷の文化的景観保存・活用検討委員会, 大谷の文化的景観保存・活用事業報告書, 平成18年
- 2 大山の千枚田文化的景観保存活用実行委員会, 大山の千枚田文化的景観保存活用計画, 平成18年
- 3 澤田・河口ほか: 空間のアフォーダンス抽出方法とその調査事例について, 土木計画学研究・論文集 No.16, pp.551-521, 1999年9月